

[研究ノート]

戦後台湾の道德教育と愛国心

—教師へのインタビュー—

The Moral Education and Patriotism of Taiwan after WWII -Interview with Teachers-

山田 美香
Mika Yamada

はじめに

1. インタビュー
 - 1.1 質問内容
 - 1.2 対象者が学校で勉強した道德教育
 - 1.3 生活運動・生活教育
 - 1.4 道德教育でどのようなことに注意をしたのか
 - 1.5 愛国心教育はどのように教えたのか
 - 1.6 親にどのような道德教育をするのか
 - 1.7 どのような道德教育が必要か
 - 1.8 道德教育の必要性
2. 対象者が書いた用紙から
3. 雑誌における愛国心教育
4. 中学の教科書
 - 4.1 国文
 - 4.2 童子軍
5. 高校の教科書
 - 5.1 国文
 - 5.2 国学
 - 5.3 中国文化史
 - 5.4 中国文化基本教材

おわりに

要旨 戦後台湾において、当時具体的にどのような道德教育が行われていたのか、それが本研究の中心的議題である。道德教育における愛国心教育の状況について1960-90年代の中学校教師2人にインタビューした。そこから、道德教育における中心は愛国心教育とも言えず、むしろ生徒に必要な指導を行うなかで、道德教育と愛国心教育が行われたという状況が明確になった。中学において、愛国心教育は当然重視されたが、しかし愛国心教育だけでは生徒の指導は十分できるわけではなく、生徒指導と道德教育が生徒の問題に対しては重要であった。

キーワード：戦後台湾、道徳教育、愛国心教育、公民教育

はじめに

本研究は、戦後台湾における道徳教育・愛国心について、関係者へのインタビューと雑誌・教科書を中心に論じたものである。インタビューでは、全台湾で行われた新生活運動における学校教育、当時の生徒の状況に対して、教師がどのような気持ちで道徳教育、愛国心教育を行ったのかについて聞いた。インタビューの対象者は、台湾文藻外語大学張汝秀先生に紹介してもらった。

インタビューを行った際、教師から「国文」「童子軍」が道徳教育に影響があったという話を聞いた。そのため、当時の「国文」「童子軍」の教科書も調べ、教科書が何を中心に論じられたのかを説明する。これらのことから、主に1960-80年代当時の道徳教育と愛国心の状況について明らかにしたい。

日本における道徳教育や愛国心の先行研究は、戦前の日本植民地時代が中心である¹。陳文媛(1990)は、「中華民族の道徳文化の回復を強調し、儒教思想が道徳を支配しており、さらに儒教思想を通して、より国家中心の道徳理念が植え付けられるようになった。したがって、道徳教育が常に儒教思想の伝達の道具となり、国家の愛国教育政策の道具となってきた」²とまとめているが、その論点の背景である資料の提示がなく、1990年代以降の状況は触れていない。山崎直也(2009)は戦後から現在に至る中学の公民教育について論じているが、実際に教師がどのように愛国心教育を行ったのかについては論じていない³。

一方で、台湾では、公民教育との関連で愛国心教育に関連する研究は大変多い⁴。「国文」の教科書や童子軍を論じたものも多い⁵。

公民教育について、陳光輝は、「民国69年国家建設研究会の建議事項は、教育方面では4つである。家庭、学校、社会の三方面で公民教育強化推進を合わせて行う。児童青少年の民主法治の正確な観念を養成し、現代社会に適応する能力及び愛国愛集団を養成する」⁶と、学校だけではなく、家庭、社会を含めて公民教育が行われたと述べている。

童子軍については、中国大陸で行われていた童子軍が台湾でも学校で行われ、それに関する研

¹陳文媛「道徳教育の再検討—台湾の日本植民地時代の道徳教育と現状の考察を手がかりとして」慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要(30)、pp89-96、1990年、p.92。山田美香「戦後台湾国民小学の道徳教育」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第29号、平成30年1月、pp.167-190。山田美香「戦後台湾における高校の道徳教育」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第30号、平成30年7月、pp.129-149。

²陳文媛(1990)、p92。

³山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂、2009年。

⁴張鎧焜「國小生活與倫理教科書德育課程觀之轉變——從64年課程標準本到78年改編本」『教科書研究』、2015年、8卷3期(Vol.8, Issue 3)、pp.77-111。李琪明『德育課程之理想與建構：我國國民中小學德育課程研究』師大書苑、民國89年。林朝鳳主持『國民中學公民與道徳科教師手冊編輯方式及內容編選之研究』國立編譯館、民84年。教育部人文及社會學科教育指導委員會編『公民與道徳教育之趨勢』民國87年。

⁵張育璋「國小一至三年級國語文教科書品格教育內容分析之研究」國立臺東大學教育學系(所)、民國96年、碩士論文。

⁶陳光輝「加強國民中學公民教育的途徑」、中國訓育學會『訓育研究季刊』第二十一卷第一期、民國71年7月20日、p.5。

究は多い⁷。また、童子軍に関する教員養成は、「1955年童子軍教育専修科ができて、1968年に公民訓育学系、2002年には、公民教育と活動指導学系」⁸というように、童子軍・公民教育に関わる教員養成の学科が大きく変化し、その時代背景を反映していた。

・公民教育、道德教育、愛国心教育

公民教育は儒家思想も重視するとはいえ、道德的価値感を獲得するのが目的ではない。公民として正しいあり方を示すのが公民教育である。そのため、公民教育と道德教育の目的は明らかに違うと考える。

これまで台湾では公民教育・道德教育と愛国心教育は一体化したものといえた。中華民国時期、その後国民党軍が台湾に移った後の道德教育・公民教育について、張秀雄は、三民主義との関連で、次のように述べている。

我が国の公民課程は、古くは「修身科」、民国11年新学制が頒布され、「公民科」と改められ、民国17年国民政府訓令で「党義科目」が増設され、民国18年、教育部は一度「公民科」を「党義」とした。民国28年、29年の間に、「礼義廉恥」の共通の校訓を定め、青年守則を頒布した。公民と三民主義の教育は密接となり始めた。民国35年、政治協商会議が「和平建国綱領」によって、三民主義課程を取り消すことになった。政府が台湾に移った後、大陸が陥落した教訓に鑑み、民国43年から、再び中等学校で三民主義科目を回復した。同時に、先の総統蒋介石の「民生主義育樂兩扁補述」及び「新生活運動綱領」の要旨によって、「生活教育実施方案」を定め、公民教育の効果を増進させた。公民課程の内容は、三民主義を中心に今に至る⁹。

しかし、公民教育・道德教育・愛国心教育が必要とされた時代とは違い、今世紀に入ると、公民教育・道德教育と愛国心教育が強調されることも少なくなった。

本研究は、「公民教育」ではなく、教師がどのように「道德」を生徒に伝えようとしたのか、愛国心との関連で議論を進めた。そこで、道德教育において愛国心教育を行った教師に話を聞くことで、当時の教育状況を聞くと同時に、現在の道德教育に対する視線を明確にしたいと考えた。

1. インタビュー

1.1 質問内容

⁷劉彦俊編著『童軍概説及其史略』水牛出版社、出版年不明。謝政諭主編『中華民國童軍創始100年學術論文集』童軍總會、2012年。

⁸劉慶餘「国民中学総合活動領域童軍教育専長教師專業能力之研究」謝政諭主編『中華民國童軍創始100年學術論文集』童軍總會、2012年、pp.184-185。

⁹張秀雄「三民主義教育 在公民教育中的角色」中國訓育學會『訓育研究季刊』第二十四卷第二期、民国74年9月20日、p.21。

本研究では、1970年代から1990年代に教師として活躍した2人の道徳教育について分析的に報告する。今回の調査については、名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理委員会にインタビュー調査の承認を受けている(ID番号17026)。

インタビューは、2018年7月6日、台湾高雄市で、教師としてどのような意図で生徒に授業をしたのかについて、2時間程度、半構造化インタビューを行った。下記が、そのインタビューの項目である。

(質問項目)

- ・自分が受けた道徳教育は？
- ・先生になってから、生徒に道徳教育を教える時に、どのようなことに注意したのか？
- ・道徳教育は、どのような意味があると思うか？
- ・教科書は何を使っていたのか？
- ・教科書でどのような授業を行ったのか？
- ・愛国心教育はどのように教えたのか？
- ・国家と道徳との関係をどのように思っていたのか？
- ・生徒の親と関わるなかで、どのような道徳教育が親にも必要だと感じたのか？
- ・先生としてどのような道徳教育をするのが重要だと思ったのか？

・対象者

2人の対象者(対象者1、対象者2)は、対象者1が1943年生まれ、対象者2が1948年生まれで、台湾南部の中学校教師をしていた者である。また、学校現場で生徒に教えた時期は、1970年代から1990年代である。2人は5歳差であるが、中学校教師として指導をした時期はほぼ重なる。

1.2 対象者が学校で勉強した道徳教育

対象者1・2が教育を受けた時期は、日本植民地が終わった後で、小学校は台湾人教師、中学校は外省人の教師が多かった。教師の養成機関も十分でなかったため、植民地が終わって早い段階では、教師として能力がある者はそれほど多くなかった。

そのときはね、教師は少ないので、すごく足りない状態。ですからその時、小学1年生の時は、1名の先生、そして、その1名の先生はすべての教科を教えなければならないということですね。その時の先生は、台湾人で、日本の教育を受けた人ですから、でも教えるために、短期的な教師の教育を少し受けた。実はその時の先生のレベルはかなり低い状態。本当の教師の資格とは、やはり言えないですね。

中学校になったら、その時の先生の数はかなり多い。各教科それぞれに先生がいて、それ以

外に担任の先生がいて、生物と物理、農業つまり農作それぞれ1名、それと音楽の先生、その3名の先生は台湾籍の先生で、他の科目は全部中国からの、つまり外省人の先生に教えられた。

高校まで、台湾籍の先生に教えられた科目は、英語、物理と化学で、それ以外は全部外省人。

(対象者1)

1.3 生活運動・生活教育

蒋介石が新生活運動を進めたことにより、政治的背景から学校で生活教育が行われていた。蒋介石が進めた運動とはいえ、その内容は、「親孝行、平和、礼儀、服従、節約、勤勉、清潔＝健康のため、助け合い＝人を助ける、学問＝世界を助けられる、一中略一、粘り強く続ける」(対象者2)と、教師が教室で行う生活教育は、生徒の状況に合わせた教育であるので、それほど政治性がなかった。

1.4 道徳教育でどのようなことに注意をしたのか

道徳教育は単なる知識を教えるだけでなく、実践の重要性を伝え、生徒が実際に行為をするこゝと、そのために教師が何をすべきかを考えることが必要である。

「一番注意していたのは、やっぱり、道徳の知識、それを教えた後、実践ですね、どういうふうに移すか、が一番大切、つまり、教えられたらすぐ実行する。それがすごい大事。それで、実行することは、長く続けること」(対象者2)と、生徒に何度も必要な知識を教えるは実践させることをしていた。この教育は、少しずつ生徒に良いことと悪いことを教えて、良いことを実践させることを教えていくという、決して特別なものではなかった。重要なのは、「道徳行為の問題で、よくないことはしない。いいことはどんな小さいことでもやるべき、悪いことはやってはいけない」ということを、生徒が理解することであった。

知識はあっても道徳的行為をするのは難しいが、それを工夫して生徒に実践させるようにするのが教育である。体得が難しい道徳的な知識・価値の実践を無理に行わせるものでもなく、例えば、日々の生徒同士の喧嘩で、道徳的な価値観を教え実践した。

「中学生は喧嘩、よくありますね。そういう喧嘩の時、相手を傷つけない、それがやはり一番大事」(対象者2)と言うほど、1990年代は喧嘩が多く、喧嘩をやめさせるために、どのように対応したらいいのかを生徒に教えた。

生徒の気持ちを落ち着かせ、自分がとるべき行動を考えさせるなかで、道徳教育は道徳的な価値を学ぶのではなく、実際の生徒たちの状況に対して、どの道徳的価値をどのように生徒に伝えていくのか、それは教師がその場で行うべきことであった。喧嘩が多かった理由は、「その時代の進学ではランク付けがすごかった。よく喧嘩するのは生活上のことで、下のランクの生徒」と、

厳しい進学熱についていけない生徒が多く喧嘩をしたという。

道徳教育として、中心的な科目は「公民と道徳」であった。楊育梅（1980）は、「国民中学『公民と道徳』科の教育は、公民道徳の知識を伝授するだけでなく、さらに人としての態度と作法の指導を含み、さらに重要なのは、生徒に中華民族固有の美徳を発揚させ、一人の正々堂々とした中国人となることである」¹⁰と、その目的を書いている。

生徒は興味を持って「公民と道徳」を受けたのかと言うと、「うん、まあまあ。生徒によって違う。生徒たち、みんなおとなしいから、騒いだりしない」（対象者2）と、「公民と道徳」が好きか嫌いは別として、まじめな生徒が多く、授業妨害をする生徒はいなかったと言っている。教師が思うように授業ができたといえる。

教科書の使い方は、「やり方としては、3つあります。最初、道徳の解説。その次のやり方は、質問して、生徒に答えてもらう。もう一つは、グループに分けて。グループみんなで議論して、それを最後まとめて報告してもらう」（対象者2）と、教科書を読んで解説するだけでなく、多くの教育方法を用いていた。

最初、教科書を説明して、たまには質問して、あるいはみんなと討論して、そういう形で授業をやっていくんですけど。一中略一。一カ月に一回実践のなかで一つの目標があって、一カ月でみんなどれくらい実践をしたのか、それをクラス会の時、担任の先生が話して補った。一中略一。それ以外に、ボーイスカウトの授業で、つまり持っている知識と人と関わることでいろいろ勉強していく。まあ、実践とも言えますね（対象者2）。

学校は政治（公民）教育を重視したが、道徳教育も重視した。道徳の授業だけでなく、クラスで1か月ごとに目標を立てるなどして、生徒が道徳的なものを学んでいくという状況があった。当時、誰もが、学校で政治教育・道徳教育を重視していたが、ボーイスカウト、つまり童子軍のように実践を重視する教育も行いつつ、道徳を教え道徳的な実践はなされていた。童子軍が、戦後台湾で科目として継続されたのは、戦前日本の影響があったということである。

中国では戦前からそういう授業があって、中国と日本は戦争でしょう。その戦争のために特に男性は軍事訓練を含めて、いろいろ勉強させる。最初はそういう目的。（対象者2）。

勉強熱心な学校では、童子軍にあまり興味を持つこともなかったが、少なくともほとんどが童子軍を経験したことから、対象者2は、今でもテントを張ることができるという。童子軍は決してキャンプをすることが目的ではなく、あくまで「生き残るための教育」を、生徒が身をもって理解するために行われている。21世紀になるまで、童子軍の科目が実施されたのは、政治的背景

¹⁰ 楊育梅「加強推展青少年公民教育重要性」中國訓育學會『訓育研究季刊』第十九卷第二期、民国69年9月20日、p.16。

があったためである。

1.5 愛国心教育はどのように教えたのか

愛国心教育は、基本的に、教科書通りに教えたようである。「直接は言わないですけどね。国って。ちょっとまわって教えますね」(対象者 2) と、生徒に対して、愛国心について教育をするが、しかし、絶えず愛国心が必要であると強く言い続ける教育ではなかったようである。それでも教科書の内容は愛国心の重要性を強く論じたものであった。対象者 2 は教科書を教える立場であったが、次のように国に対する考え方を述べた。

国って領土、国民主権、国民が要素。つまり、今、自分がいるのは国が守ってくれるからね。それぞれの職業、自分のやるべきことを一生懸命やって、みんながそれぞれ力を尽くして、やるべきことをやって、それこそ国を守る。もし国が侵略されたら、やはり国を守らなければならないですね (対象者 2)。

教科書には愛国心を書いてあるが、教科書通りに教えるべきだというわけではなく、国を守るという気持ちが重要であるという考えのもと、教科書を教えていた。

日本はなぜ愛国心教育が弱いのか？それはアメリカからの圧力によって愛国心が弱くなったんじゃないかな。そして、台湾の場合、蒋介石は中国と内戦状態を作ったので、台湾の人々、台湾の学生は、みんな愛国心を深めなければならない。そういう歴史的な背景がありますね (対象者 2)。

この中国大陆と台湾の政治的関係について、公民の教科書では台湾側の主張を強く記しているが、それをどのように教えたのであろうか。

確かに、教科書はこういう風に載っているので、そのまま教えなければならないですね。それで教えるのは、愛国心、ほとんど自分と国との関係です。愛国心は、本当ならもう少し成長してから愛国心も持ち続けるか、愛国心が弱くなっていくのか、それは人によって違います。愛国心が弱くなったのは、今の為政者かな、為政者に失望して、弱くなっていくのかな (対象者 2)。

教科書の内容が、将来の政治的な立場に影響を与えることもあるだろうが、その時代の為政者がどのような政策をとるのか、それによって自分の生活が大きく変わるため、為政者の考え方如何で中台関係、愛国心に対する意識が変わるという思いを持っていた。つまり学校教育より為政

者がどのような施策をするのか、それがそれぞれの人の愛国心を決めるというのである。

1.6 親にどのような道德教育をするのか

親と教師の道德教育に対する意識は、ずいぶんと異なる。教師は知識で「徳」を伝えるが、親は人間関係のなかでの「生きる術」を子どもに伝えることが必要だと考える。教師はあるべきものとしての「徳」を生徒に教えるが、親は「生きることに必要な術」を教えることを重視する。学校で教えられた「徳」が生活のなかで生きることもあるが、学校で教えられた「徳」だけでは生きていけないこともある。

一略一、学校の先生の教え方と、保護者の考え方と一部ギャップがあつて。具体的にどんなギャップがあるかという、買い物とか切符を買う時に列があつて、でも親はそれ、並ばなくてもいいじゃない、って。この部分で違いますね（対象者2）。

みんなが並ばないなか、自分のみが列を作っていれば、いつまでたっても切符を買えないこともある。

教師としては、学校でちゃんと生徒に教えて、なぜ列に並ばなければならないのか、並ばないとどんな結果になるのかを理解納得させる。（対象者2）。

切符一つとっても、どういう方法が一番早く得ることができるのか、それは普段の生活のなかで了解されているものがあり、学校で教える「徳」とは違うものである。教師としては「徳」を教える必要はあるが、しかし生活者として、一番いい切符の買い方がどういうものであるのかは、生徒に理解しやすい方法で納得できる授業を実践する必要性を述べた。

1.7 どのような道德教育が必要か

教師はどのような道德教育をすべきであろうか。

一略一。小学生中学生それ以上には、心理的な発達段階があつて、それを考慮しなければならない。というのは小学生の場合、先生は崇拜するもので、英雄みたいな存在ですから、でも中学生高校生になったら、先生はもうそんな存在じゃない。発達段階も配慮しなければならない。道德教育、それ以外で大事なのは、先生自分自身。生徒の手本にならないとそれはだめです。それが一番大事。それをしないと生徒はやっぱり納得できないですね。ある先生が生徒に暴力じゃなくて、口で話したけれども、授業が終わったら殴られた。そういうことがありますよ。だから結局、生徒の発達段階、それを考慮してどういうふうにすればいいか、

ということです (対象者 2)。

もう一つ、道德教育で一番影響力が強いのは、公の人物の行動とか言動、国会議員とか。それらの行動は、特に子どもたちにすごく影響があって、不祥事とか、悪い面はすごいみんな真似しますから。それはすごく大事。台湾だけじゃなくて、世界各国、同じじゃないかな。公の人の行動は国民に対してすごく影響があります。特に、みんな悪いことを真似することは多いですから (対象者 2)。

教師が一生懸命生徒に道德の重要性を説明しても、生徒にとってその教師の言うことが理解できなければ、生徒は教師を殴ることしかできない。教師がきちんと生徒を見て発達段階を理解したうえで生徒とかかわりを持たないと、生徒は、教師が言葉でもって自分を暴力的に叱っているようにしか見えないのである。さらに、社会全体で目指すべきものがある、それを生徒も感じることができれば、生徒も前向きに世の中を理解していこうとする。学校の道德教育だけでなく、社会のなかで必要とされる道德がないと、生徒が道德を学ぶことができないという。

1.8 道德教育の必要性

道德教育は、どのような子どもに必要かと言うと、十分道德を理解していると思われる優等生も道德教育が必要だという。「一略一。優秀な人は、弁護士とか、法律に明るいから、法律を利用して罪を犯すのは少なくない」(対象者 2) というのは、世間ではよく起こることである。道德教育は、「一を守る」「一すべきだ」ということさえ守れば道德教育の効果があったと考えられるため、法律の理解があればあるほど、法律に触れない範囲で自分の利益を考えることになる。

それでは、道德教育では何を教えるべきであろうか。

生徒が成長していく時に、道德のどんなところが大事かと言うと、「ますます道德教育を疑っています。道德教育というのは、昔はすごく信じられていて、生徒に対していい影響、いい将来を与えることができました。しかし、今は疑っています。それはなぜかと言うと、道德教育、道德の観念、それを持つ人は、生きるために逆に道德が邪魔になります。ですから、どうすればいいでしょうね」(対象者 2) と、道德教育は、現在の生活のなかではあまり重視されないことを述べた。

そこで、道德を学んだまじめな人は、社会では出世はできないのかと質問した。

難しいというよりも、汚い。それをしないと、出世できない。全部とは言わないけど、そういう傾向がありますね。一中略一。とは言っても、やっぱり、私たちは守らなければならないんです。それは教師として、がんばらなければならないということです (対象者 2)。

最後に、日本の道德教育は「特別な教科」という「教科」となり重視されたが、一方で、台湾では道德教育を重視しなくなったことについて話をした。

不思議です。道德教育って統治者の道具、ですね。台湾の場合はさっき言ったように、統治者たちの道具ですけど、今はその道具を放棄しました。それを放棄した一般の人たちは、どうすればいいか、分からなくなっています。ですから、今、生徒は、先生から道德教育をインプットされています。しかし、社会的によくない現象もインプットされています。生徒の頭の中では、善悪が分かっています。道德教育というものは人間の一番深いものです。一番大事なものです。教科書があるかどうか、それは大事なことではなくて、先生は生徒に正しい道德観念を育てる、それが一番大事です。生徒に道德観念を与えた中学の頃は何も効果が見えないかもしれませんが、いつか効果が出てくるかもしれません。それを期待しています。それで暖かく、明るくなりますね（対象者2）。

2. 対象者が書いた用紙から

事前に対象者に伝えたインタビュー項目について、対象者が自発的に質問項目ごとに、自分の考えを用紙に書いた。そこに書かれたことは、大きくまとめると、以下の通りである。この用紙を掲載することも対象者から承諾を得ている。

対象者1、対象者2が学生時代に受けたのは、儒家思想教育と同時に政治的な教育であった。教師になってから、研修で、西洋的な道德教育を学ぶものの、当時の学校現場で重視された儒家思想の「四維八徳」と政治的な教育が道德教育の中心と言えた。

対象者1、対象者2は、社会において、人は道德を持つべきであると再三繰り返して説明した。しかし、道德的なものを身につけている者が、社会にどのような還元をするのか、突き詰めて考えることは難しかった。道德を学んでいない者が、社会で問題を起すことがあると説明はできたが、道德を学んだゆえにどのような社会的な行動ができるかという点については、はっきりとした説明を聞くことはできなかった。

対象者1が道德で最も重視したのは徳目であり、それを生徒に行為実践に結びつけるよう、様々な指導方法で教え、生徒がそれを受け入れるようにしたようである。対象者1は、「道德教育の極みは学習者が『己を修める』(修己)と『よい集団となる』(善群) ことができるものであり¹¹、『内聖』の功夫と『外王』の事業を行うことができるようになることである」と論じ、道德教育を行うことで、自分を高め、集団作りができる環境を作っていくものだと書いた。道德教育は学校における生徒・集団指導というだけでなく、対象者1は、「人類社会を高める紐帯」として、社会全

¹¹ 「修己」「善群」は、『善』は治理教化し、良いものに変化させるという意味である。『群』は自分以外の人で、衆人、集団、社会、国家、世界の意味である。合わせて、つまり、『集団社会国家を治理教化し、より良いものに変化させる』、これは、『人として自立すること』『自覚的にそれを考える』ということの意味と同じである（対象者1）。

体において道德が必要であることも論じている。

どのように生徒の親に道德教育を行う努力をしたかという、家庭間の親子の関係は道德の中心であったことから、親子間の人間関係から道德を学ぶこと、またそれが最も重要なことであるという。家庭で育てている以上は家庭で道德教育をすることがその子どもの道德的な力を高めることになるというのは当然である。道德教育は、「両親ともに密接に一緒に行い、子女のモデルとなる」というもので、生徒にとってモデルとなる両親が道德的行為を行わない限り、その生徒も道德的に発達しないと考えていた。

このように、社会全体で道德教育は行われるものであるが、道德教育を進めるうえで、教科書はどのように使われたのであろうか。1990年代まで教科書は、「国立編訳館が編集した」全国統一のものを用いた。当時は国立編訳館以外の教科書はなかったため、「自分が収集した歴史の話、生活の事柄、文献も例として教科書の補助として使った」と、教科書中心ではあったものの、対象者1が作成した教材も一部使うことで、生徒がより道德的なものを身につけるようにしたという。

対象者1は1940年代生まれであるため、「国家があってこそ国民がある」というのは当然で、いざとなったら国家防衛をしないといけないという考えを強く持っていた。戦前・戦後の台湾の状況を見れば、自分たちの国家がなければ、国家によって保障されるものがないというのは当たり前とも言えた。「戦後台湾では、統一・独立の意識が次第に分かれていき、政治的な変化が国家認識の危機を生んだ。これによって、愛国心の認知は一つの大変重い課題となった」(対象者1)。

愛国心の認知は、まず学習者に国民個人と国家の関係を理解させるべきである。国家の保護があれば、国民個人の生命財産は保障される。優れた国民がいれば、国家は強くなり、これによってそれぞれの国民は彼の国家サービスの義務を尽くすべきである。必要な時には、はなはだしくは自己の身家生命を捧げて、国家防衛を行う。

その次には憂い・患いの意識があれば、国家が衰弱し、外国の侵略を受け、国民の生命財産は保障されなくなる。例えば過去に列強に欺かれ侵略された膨大な悲劇がある。

とはいえ、教師が、どうして国家のために国民が生命を捧げると、生徒に教えることができるのであろうか。政治教育と愛国心教育が最も重要であるとされた時代に教師をしていた者が、教師として若い世代に何を伝えたかったのだろうか。

人は生きていくと国家に隷属する。極めて少数の人を除いて、国家選択の自由はない。しかし国家は常に一人の独裁者・独裁的な党が掌握する。彼らが永続的に運営するため、当然積極的に教育を推進し、道德を昂揚し、国民を従順な小さな白い兎と変える。彼らの生から死まで彼らの意識形態を独裁者の言う通りにさせる。この一人の独裁者、独裁的な党はさらに執政の機会を利用し、極めてあらゆる手段を用いて党に反対する者に身をひるがえす機会も与えず、永遠に政権を掌握し、国家をコントロールできるようにする(対象者1)。

すべての国家を修める行政の品格修養、知識涵養、価値観は政策決定に影響する。新聞・メディアの経営者の道徳水準も、その国の人の道徳観念、価値判断に対して正確あるいは間違った方向に導くことがある（対象者2）。

政治教育と愛国心教育が中心である道徳教育において、教師が本当に伝えたいのは、国民がどのように国家と付き合いしていくのかということであった。国家との付き合い方は、教師が単純な政治制度を教えるだけでは、生徒もどのような行動をとるべきか分からないであろう。愛国心教育は、事実としての国家を教えるものではなく、国民が国家を変えるために学ぶことであるという。対象者が本当に伝えたいのは、生徒がどのように国家と付き合いしていくのかということであった。愛国心教育は、国家について単純に教えるものではなく、年齢発達とともに生徒が国家について考えることが重要だと理解していた。

3. 雑誌における愛国心教育

1960-80年代の教育雑誌では、儒学教育と愛国心教育の必要性が絶えず言われ、儒家思想を尊重しない愛国心教育の存在は認めないという内容が多かった。

訓育雑誌において、周林根は、「世界大同」「天下為公」が「政治思想の基礎」であり、「倫理建設は国民道徳建設で、総統が言うところの忠・孝・仁・愛・信・義・和・平の八徳を精神とする」¹²ものだと記している。つまり、蒋介石総統の思想には四維八徳があり、国を立て直すために儒家思想を用いたという。この時期の訓育雑誌は、どのように儒家思想で愛国的な民族精神教育を行うべきなのかが中心であり、その傾向は1980年代まで続く。

さらに生徒指導の雑誌を見ると、民族精神教育は生活教育との関連で述べられている。余瑞霖は、「生活教育は、生徒の生活経験を充実させ、生徒が社会に服務する能力を増進させ、その目的は教育力で『人民の生活を充実させ、社会生存を扶植し、国民の生計を發展させ、民族の生命を延続させる』」¹³と、生徒の日常生活をより良いものにするだけでなく、生活を通して、社会・国家を發展させるものが生活教育として考えられていた。生活教育は民族精神教育にも重要であるという理解であった。

生活教育の流れは、陳如一が、蒋介石新生活教育について説明し、1934年新生活運動、1966年中華文化復興運動、1968年日常生活規範（国民生活規範）、1968年教育部『生活教育实施方案』改訂の経緯を説明している¹⁴。さらに、1968年「訓導手冊」が編集され、1973年に出版したこと

¹²周林根「総統教育思想與禮教」、中國訓育學會『訓育研究季刊』第十一卷第二期、民国61年9月30日、pp.2-3。

¹³台湾省教育庁督学余瑞霖「加強生活教育的我見」『国教輔導』第十五卷第六期、p.4142。

¹⁴陳如一「從『新生活運動』到『國民生活須知』」、中國訓育學會『訓育研究季刊』第十二卷第四期、民国63年3月31日、p.15。

も紹介している¹⁵。戦前からあった新生活運動が戦後も行われたのである。陳如一是、1973年、教育部が編訳館に、「中華文化復興運動を推進するため、『今後国民生活須知』の原文を小中学の教科書に掲載し、児童生徒に全文を見せる指導が言われた」¹⁶ことも記している。

蒋介石の新生活運動が行われることで、教育部もそれに対応した教育を行い、全国的に生活教育運動が強力に実施されたのである。生活教育は生活の質を高めることに加えて、愛国教育と直接的に関係があった。

新生活運動、生活教育運動について、龔宝善は、「教育部は、1962年に『生活教育方案』を頒布し、各学校に推進するよう通知した。この方案には、目的・原則があり、日常生活教育、健康生活教育、道德生活教育、学習生活教育、公民生活教育、労働生活教育、職業生活教育、休みの日の生活教育の8項である」¹⁷と、生活教育運動の教育内容を書いている。

以上のことから、道德教育、特に愛国心教育において、儒家思想と民族精神教育、生活教育が大きな位置を占めたことが分かる。

4. 中学の教科書

ここからは、「国文」「童子軍」の教科書などを紹介したい。

4.1 国文

1952年から1994年までの中学校の課程標準により作られた教科書は、教科書の最初の説明箇所、「愛国」「中華文化」という言葉が出てくる。国文科は、基本的な国語能力を身につけるのが目的であるが、それと同時に、愛国心教育、民族教育も行うことが目的とされた。

課程標準において、国語として必要な能力が示されたのち、最後に、「愛国」「伝統文化」「民族」も学ぶことが書かれている。

1952年 中学課程標準修正公布

1. 聞いたり話したり及び文章を読み、分かりやすい文語文を読む能力を訓練する
2. 国語の運用及び作文能力を養成し、生活上応用できるようにする
3. 閲読に興味を持ち、習慣とする
4. 民族の輝かしい事績及び国際的に美しい文字に助けられ、愛国思想と民族意識を喚起し、大同精神を発揮する¹⁸

¹⁵陳如一「從『新生活運動』到『國民生活須知』」、中國訓育學會『訓育研究季刊』第十二卷第四期、民國63年3月31日、p. 15。

¹⁶陳如一「從『新生活運動』到『國民生活須知』」、中國訓育學會『訓育研究季刊』第十二卷第四期、民國63年3月31日、p. 15。

¹⁷龔宝善「推行生活教育成功的樞紐」『国教輔導』第十五卷第六期、p. 4041。

¹⁸台湾国家教育研究院教科書図書館教科書數位文庫から。

1962年 初級中学課程標準 初級中学国文課程標準

1. 生徒の国語を聞く、話す、現代文の作文、および簡単な文語文を読む能力を訓練し、生活上応用できるようにする
2. 生徒が閲読と作文に興味を持ち習慣とするようにし、その思想感情を陶冶する。本国の語文と伝統文化を重視しそれを役立たせ、民族精神を発揚する¹⁹

1973年『国民中学国文科教科書』には、「台湾省及び台北市各国民中学国文科新編教科書教材座談会でも多くの具体的、貴重な意見をいただき、我々の編集方針を定めるのに、とても大きな助けとなった。我々はこの教科書で、生徒たちが国文の興味を増進させ、閲読作文能力を強化し、同時に倫理観念、民主的なもの及び科学精神を養成し、愛国思想を強め、進んで中華文化を宏揚させるよう期待する」²⁰と書かれている。

この教科書第一冊の最初には、蔣中正「我々の校訓」があり、総統の文章を最初に持つてくる配慮がなされている。それ以降は、近代における胡適、孫文の文章もあるが、多くは古文である。第三冊は、最初に蔣中正「学んで人と為ることと民族の復興」があり、その後、アインシュタインや近代小説家郁達夫の日記が出て来る。第四冊は、最初に孫文「中国回復に固有の道徳」、それ以降に、蔡元培「美育と人生」、ロマン・ロラン「楽聖ベートーベン」も載っている。教科書には近代の著名な文章も含まれるが、多くが古文である。

1984年『国民中学 国中国文教科書第一冊』では、「本書は、教育部1983年頒布の国民中学国文課程標準により編集された。この教科書は、生徒が国文に対する興味を増進させ、閲読・作文能力を強化し、同時に倫理観念、民主的なもの、科学精神を養成し、愛国思想を強め、中華文化を宏揚することを期待するものである」²¹と、「科学精神」という言葉もあるが、「愛国思想」による「中華文化宏揚」が中心的なテーマである教科書である。教科書は、近現代文と詩・古文が含まれるが、第一冊は孫文「国家歌詞」、蔣中正「我々の校訓」があるなど、これまでと内容的には変わらないが、多少読みやすい時代の文章が出て来る。

1994年国立編訳館主編『国民中学国文』は、「本書は、教育部1994年頒布の国民中学国文課程標準により編集された。この教科書は、生徒の国文の興味を増進させ、閲読・作文能力を強化し、同時に倫理観念、民主的なもの、科学精神を養成し、中華文化を体認し、愛郷愛国思想を強めることを旨とする」²²と、教科書の内容はそれまでと変わらないが、教科書の色合が変わり、どの章にも絵が描かれるなど、生徒が教科書を身近に感じられるように変化している。教科書には、現代の言葉で、授業のなかで生徒が何を議論すべきかの情報があり、古文には丁寧な解説がある。

1990年代まで、教科書における生徒の学びの内容はあまり変化がなかったが、1990年代になると、生徒が学びやすい教科書作りが行われたと言える。

¹⁹台湾国家教育研究院教科書図書館教科書数位文庫から。

²⁰中華民國62年8月初版 国立編訳館『国民中学国文科教科書』第一冊、前言1頁。

²¹中華民國73年8月試用本 国立編訳館『国民中学国文科教科書』第一冊、前言1頁。

²²民国83年課程標準初版 国立編訳館主編『国民中学国文』編輯例言。

4.2 童子軍

「童子軍」では、愛国心教育を中心に、知識を学ぶのではなく、生きていく術を学ぶ活動を多く行った。「初級中学童子軍訓練標準」(1948年12月修正公布)²³を見ると、童子軍では、「自分のことは自分です」「博愛精神」を学ぶことが目標とされていることが分かる。

「初級中学童子軍訓練標準」(1948年12月修正公布)

第一 目標

- 一生活技能を鍛錬し、自分で何でもできるようにする
- 二人や物に対して正しい態度を養成する
- 三人を助け服務する博愛精神を陶冶する

第二 時間 週1時間、3学年

四訓練要項

1. 童子軍の精神の涵養
2. 集団生活の訓練
3. 童子軍の技能の増進²⁴

1960年代は、単に自分の力で生活ができるというだけでなく、「智仁勇を兼ね備えた青年」を目標としていた。童子軍にとって「博愛精神」は重要な言葉であることから、1960年代の課程標準においても用いられる。

1962年 初級中学童子軍訓練課程標準

- 1 各種活動の機会を利用し、手と頭を同時に用いて事を行い、文武両方の訓練を行い、品性と自分のことは自分で行う能力を養成し、智仁勇を兼ね備えた青年となるようにする
- 2 博愛精神を発揚し、実践を務めて行うよう注意し、一日一善を提唱し、生徒が人を助けることを楽しむようにする
- 3 童子軍の訓練方法を用いて、生徒が童子軍の規律をよく実践し、自発的に自ら童子軍に入ることを申請する

活動訓練 60 時間、服務訓練 48 時間、予備 12 時間

1年の活動訓練は、童子軍として最低必要な集団行動、歌・遊戯、行進、縄を結ぶ、国旗の扱い方について具体的に行うことで学んでいく。

²³ 「初級中学童子軍訓練標準」(1948年12月修正公布) p. 82。

²⁴ 「初級中学童子軍訓練標準」(1948年12月修正公布) pp. 82-83。

1年の服務訓練は、「服務の意義態度方法を理解する」、さらに救護と衛生、一日一善の習慣、様々な服務活動に参加するというものである²⁵。

5. 高校の教科書

高校の教科書は、「国文」「中国文化教材」「国学」「中国文化史」について紹介をしたい。

5.1 国文

国立編訳館『高級中学国文教科書』（1971年課程標準初版）は、高校の国文科教科書である。教科書には、「伝統文化を伝え、崇高な品德を養成し、時代の思想を啓発し、愛国的な観念を強化する」（編輯大意、p.1）とある。このことから、国文科の教科書の中心的概念は、愛国心教育であることが認められる。

目次は、孫文に関わる「中山樓中華文化堂落成記念文」から始まり、それ以降は蘇軾、韓愈、王守仁などの古文を原文で読む必要に迫られるものである。古文に関心がないと、正直、読むのが困難といえる。原文に対して解説は全くないわけではないが、現代語訳ではないので読みこなすには時間がかかるのではないだろうか。

1985年『高級中学 国文科教科書（全六冊）』（国立編訳館）では、「教育部1983年7月公布の高級中学国文課程標準により編輯した」²⁶「本書の編集目標は、生徒の閲読と作文能力を高め、愛国精神を強め、中華文化を宏揚する」²⁷と、教科書の目的は、1970年代とそれほど違いはない。

1983年高級中学国文課程標準による教科書²⁸には、「愛国精神を強め、中華文化を昂揚する」と述べられ、全体と見ると、1971年の教科書に比べて思想教育の側面が多少弱くなっているように見えるが、実質的な変化はない。目次を見れば、最初に蒋介石「我々の国家的立場と国民的精神」を持ってきて国家のあるべき姿を示し、それ以降は歴史的な文章あるいは詞が並べられている。

以上のように、1970-80年代の教育は孫文や蒋介石の影響が強いものの、国文科はあくまで最初の1篇に孫文あるいは蒋介石に関わる文章を載せ、それによって、生徒に、最も重視される政治上の人物を学ばせ、身近に感じさせるようにしている。

2000年近くになると、1999年出版の国文科教科書（1995年高級中学国文課程標準によって編集）は、古文教材に対して現代語訳が少しあるため、以前に比べ、内容は理解しやすいかもしれない。1999年の教科書の目標は、「生徒の閲読の興味を高め、作文能力を増進させ、人格気質を陶冶し、愛郷愛国の精神を強め、中華文化を宏揚する」²⁹と述べられている。教材は、「1. 歴代古典詩文を

²⁵1962年「初級中学童子軍訓練課程標準」

²⁶中華民国74年1月新編本初版 国立編訳館主編『高級中学国文第二冊』編輯大意。

²⁷中華民国74年1月新編本初版 国立編訳館主編『高級中学国文第二冊』編輯大意。

²⁸中華民国74年1月新編本初版 国立編訳館主編『高級中学国文第二冊』編輯大意。

²⁹民国88年8月初版、李蒂芬など『高級中学国文第一冊』南一書局、編輯大意。

精選したもの、2. 現代文学の状況が分かるもの」³⁰と、古典と現代から選んだと書いている。しかし、教科書には、現代文学はほとんど紹介されておらず、現代詩が紹介される程度であり、あくまで古文を読むことが中心である。

5.2 国学

「1983年修正公布『高級中学選修科目国学概要課程標準』で編集された教科書」では、「上下両冊で、高級中学第二学年の選択科目の用とする」³¹として、高校2年の時、選択科目「国学」で、さらに中国文化を学ぶ機会があった。「生徒に国学の常識を指導することを主とし、内容は6つに分類できる。上冊は国学の基本認識、文字の構造と変化、経学略説、下冊は史学略説、子学略説、文字略説」³²と、中国人であれば本来知っている必要がある中国学を学ぶように課程が作られた。

5.3 中国文化史

『中国文化史』（南一書局、2005年）は、「教育部1995年10月公布の高級中学課程標準総綱によって、高級中学選択科目歴史課程標準により編集し、章節は、教育部頒布課程標準の中国文化史教材綱要の規定に倣い計画を立てた。本書は1冊で、高級中学第三学年第一学期の用とする。毎週の教育は3回」³³として、内容は、第一章が中国古代文化であるが、年代別ではなく内容ごとに区切った章立てになっている（例えば第四章「學術思想の变化」、第五章「文学史と芸術」）。最後の第九章は、「現代的文化の変遷」であるので、「中国文化基本教材」とは異なり、古文や特定の思想家のみを対象とはしていない。教科書は、写真・地図が豊富で、カラフルで分かりやすく、興味がわくものである。

5.4 中国文化基本教材

高校生に中国文化を教えるために、国文課程のみでなく、中国文化基本教材も使われ、主に儒家思想が学ばれた。

『高級中学中国文化基本教材』（1971年初版）は『論語』『孟子』のみが掲載され、その解説も大変丁寧で分かりやすい。

1983年課程標準で編集された『中国文化基本教材 1983年度課程標準編集 初版』には、「本書は教育部1971年2月公布高級中学課程標準『教材大綱』二『中国文化基本教材選授論語及孟子』

³⁰ 民国88年8月初版、李蓀芬など『高級中学国文第一冊』南一書局、編輯大意。

³¹ 民国74年8月新編本初版 国立編訳館『高級中学国学概要（全二冊）』編輯大意。

³² 民国74年8月新編本初版 国立編訳館『高級中学国学概要（全二冊）』編輯大意。

³³ 民国90年8月初版 張仰倫など『中国文化史 全冊』南一書局、2005年8月再版、編輯大意。

の規定、および教育部 1982 年 1 月『同意将大学及中庸納入』の指示により編集した。また、教育部 1983 年 7 月修正公布の高級中学国文課程標準において改編をした³⁴と書いている。1971 年課程標準で論語・孟子を、また 1982 年課程標準で論語・孟子と大学・中庸を学ぶように規定されたのである。1980 年代の政治的傾向を考えると、中国文化教材の教科書の内容が減ると思われたが、実際は、大学・中庸と学ぶ教材が増えている。

その内容は、「高級中学 3 学年 6 学期の教育の用に合わせ、6 冊に分けた。第一冊は格物致知(上)、第二冊は致知(下) 誠意正心、第三四冊は修身、第五冊は齐家、第六冊は治国平天下である」というように、四書の基本を学ぶものであった。

これらを考えると、「国文」ではまんべんなく古典を学び、「国学」では中国学、「中国文化史」ではさらに歴史を学び、「中国文化基本教材」では四書の基本的な知識を得ることが要求されている。これら多くの科目から、高校生に中国文化の中核的なものをしっかり学ばせることが行われた。

おわりに

最初に 1960—90 年代教師として道德教育を教えた対象者のインタビューの成果をまとめ、次いで、1960—90 年代の雑誌・教科書において、特に国家と民族についてその時期の状況を記した。

道德教育においては、学校現場でどのように生徒に愛国心教育を教えたのかが、生徒にとって最も重要だと思われた。しかし、実際に教師の話聞く限りでは、生活におけるルールを学ぶということが生徒にとって最も重要な道德教育であった。

愛国心教育に関して、対象者 1 は、愛国心教育の「国」は「国家」で、「権力者」ではないとし、国民は自分と「国家」との関係性を理性的に考える能力を持つべきだとした。

愛国心の話をするとき、国家と権力者は区分すべきである。国家は人々が安心して生活する（安身立命）場所で、愛国心教育は当然行うべき方法で行うものである。権力者が、人民に代わり国家の事務を処理するときは、必ず法律によって行政を行うべきで、人民の幸福を謀るためのものである。これによって、例えば専制独裁、汚職・法を弄ぶ、好戦的、人民の死活に全く関心を持たない権力者は、国家を危険な周辺部に押しやるものである。あるいは、人民の意識を弄び、人民に国家に危険があると認識させることを、我々は普通で愛国心と見做すことができるであろうか。この時、選挙の票によって制裁し、二本の足で抗議し、最後は革命で徹底して翻すのは、みな私が思う愛国心の表現である。ここから、愛国心教育では、理性的な判断能力を養成することを無視することはできない（対象者 1）。

³⁴民国 73 年 8 月改編本初版 国立編訳館『中国文化基本教材 民国 72 年度課程標準編集 初版』編輯大意。

教室で受けた愛国心教育は、学校を出た後、それに影響を受けて自然に愛国心を持つ場合もあれば、社会の状況によっては一生愛国心を持っていない者もいるということである。1960—80年代は、国家が愛国心教育で人の心を支配する教育を行ったと考えるが、その後の政治的環境も変化し、単なる「国を愛する」愛国心が重視される教育には誰も興味を持たなくなった。1960—80年代を生き残った者でさえ、学校で受けた愛国心教育が自分の愛国心の在り様につながるのではなくて、現在の政治に対して自分がどのように理解・判断するのかという判断能力が必要だという。

今回は教師へのインタビューであったが、この時期に生徒として教育を受けた者の愛国心教育の理解については別稿で報告をしたい。

本研究は、科研基盤研究(C)「東アジア儒教圏の道德教育と愛国心教育—日本の「特別の教科道德」を考えるために」(研究代表者山田美香、17K04564、平成30年度)による研究である。教育史学会第62回大会(平成30年9月29日土曜日、於：一橋大学)の発表原稿「戦後台湾の道德教育と愛国心—教師・関係者へのインタビュー—」を加筆修正したものである。